



號三十四第 月五年六十和昭 行發日十・回一月毎 錢五金部一價定誌本 錢拾六金(共稅)年 一才 田杉 兼人 行發 一ノ七西座區橋京市京東 社信通盟同 所行發

# 獨伊ソを巡りて

編輯局次長 岡村 二一

私は支那のほか外國を知らない歐洲は私にとつて處女地であつたしかも松岡外相に隨行して、國賓乃至はそれに近い待遇を受けながらの彈丸の旅行であつたので、思ふやうな視察はとも出来なかつた。

そのかはり、何年かでも見ることの出来ないものを見、會ふことの出来ない人に會ふことも出来たその點にのみ多少の擧げどころをおいて少しばかり所見を記してみよう。

## シベリヤ

片道七日、雪また雪のシベリヤの汽車の旅は、私にとつて少しも退屈でなかつた。ソ聯政府が心づくしの御馳走攻めと、松岡外相の晝夜を分たぬ談論風發、坂本歐亞局長以下陸海外その他の代表者を以て構成する隨員團の親和、一考へてみると、私にとつては嘗て経験したことのない楽しい旅の思ひ出であつた。

東へ東へと車窓に走り去る無限の雪、その雪の下にあるものは即ち無限の土だ。土は萬物の母であるといふ。果して然らば、世界最大の土を有するソ聯の最大の強味は亦ここに在る筈である。

後には外相に隨つてモスクワの國立土壤研究所を視察してみて驚いた。ここでは革命も肅正の嵐もよそに、何億といふ國費に培はれて無數の科學者たちは、終日黙々と土を試験管に入れ、ガスバーナーで焼き、顯微鏡でみてゐる。それもソ聯領全土に亘り、千九百何年のどこの地方のどの部落の地下何尺、何寸の土といふ風に、實に微に入り細をうがつての研究である。

この調査の結果に基いて、土の共通性、土の特異性を先づ知り、どの土には何を蒔き、どの土には何を移植栽培するかといふことが決るのだ。世界最大の土を所有するこの國が、土の研究でも世界一なのだ。雪深きシベリヤ、虚しき曠野といふなかれ、この土がやがて生むもの、それを考へるとき我々はこの國を隣として持つといふことに深い思ひをいたさねばならぬ。

## 二つの歡迎陣

既にニュース映畫などでその様子を見られた人も多いであらうがあのドイツの盛大な歡迎振りは、私の眼には、驚くべき大きなドラマ、ナチスドイツの國家の意気に

よつて作られた偉大な脚本に基いて、最も効果的に演出された國際的ドラマといふやうに映つた。どんな田舎の小さな驛にも整然たる群衆の舞臺構成がある。中でもベルリンのアンハルター驛からシュロス・ヴェルヴユまでの沿道に演ぜられたドイツ國家の歡迎譚構成こそは、正に偉大なる藝術家の作品といひたいものであつた。そしてこの歡迎圖を寫眞に映畫に紹介するカメラ技術も亦優れたもので一面から見ればこの歡迎の全構成は、大ドイツの實力を世界に誇示する一大デモンストレーションであつたといへよう。ここに勝利するドイツの一つの姿がある。

これに對して、イタリヤの歡迎振りには、國家の意志によつて筋書が書かれてゐることは同じとして、個人は時に筋骨を逸脱して、個人は實際昂奮の餘り狂喜亂舞してゐた。情熱の國、歌の國の國民性が、整然たるドイツの表情に比べて餘りにも鮮やかに表明されてゐるのである。これは異つた歴史と國民性と指導者を持つた二つの國が、同じ全體主義國家であるが、その行き方に異つた形をもつといふ點で、興味以上の感慨を催させられたところである。

## ドイツの統制

ドイツの經濟統制、生活規正は思ひ切つたものである。國內消費は堪えられない最低限まで切りつめ

てゐる。生産が不足だから、輸入が困難だからといふに留まらない。例へば、カメラやバイエルの藥等のやうに、現在莫大に生産されつつあるものでも、國內消費は極端に制限して、これを占領地の治安工作、前線補給、海外輸出へ振り向けるといつた調子だ。ここにドイツの統制なるものが、對長期戰策として如何に周到なる用意のも行はれてゐるかを看取すべきである。物が足りなくなつたから消費を制限するでは手遅れなのだ。も一つドイツの統制を見て感じるのは、一方で必要な消費が全く自由に、公然と且つ極めて寛濶に行はれてゐることだ。軍人と官吏とか、國家の公共目的のために消費するものは、民衆の息苦しい日常生活を少しも顧慮するところなく、思ひ切つて物を使ひ、而して事に當る。國家に奉公するといふ責任と自信のもとに、彼等は民衆を怖れない、媚びないのだ。爲政者も被治者も同じ物を貰ひ、同じ量を使はねば承知の出来ない。或はそれが道徳的通念となつてゐる日本にとつて、このことは少くとも他山の石としての意義は持つものであらう。

## 三巨頭の横顔

ヒットラー總統は天才的な眼を持つてゐる。濡れた寶玉のやうな眼が、而も不思議な光を放つて煙のやうに燃えてゐる。私はこのやうな超人間的な光を放つ眼を見たことがない。一方あの明るい額と高く尖つた鼻から感じられるものは、これは又驚くべき理性、人間の知性の閃めきである。かういつた超人間的な神秘性と極めて人間のな知性とが少しも相剋することなく、極く自然に煉り合はされ、完成した一つの人格を、私はヒットラー總統に見た。總統は總ゆる作戦に自ら判斷と命令を下すさうである。總統の指導性が驚くべく自主的であり、個性的であることは、一見してその態度、相貌から窺はれるところであるが、ドイツ今日の成功は、全くドイツの固有の歴史と國民性と、この人の個性の上に礎かれたものであつて、現はれた結果の形式をそのまま輸入したところで、この三つの要素が全然異なる日本にそのまま通用すると考へるのは誤りだ。

ムツソリーニ首相とはじめて握手したとき、私はこの人は誰かに似てゐるなと思ひながら、どうも思ひ出せなかつた。後に汽車の中で「ああ、上野の山の上にある」と氣がついた。然もムツソリーニ首相は生きゐる西郷さんではなく、銅像の西郷さんに似てゐるのだ。ムツソリーニ首相は生ける銅像といつた巨人である。この人なら、何も聞かず何もいはずに、何も聞かぬやうな人間的な氣配が、太い線、大きな人間性が會ふ人に迫るといつた人だ。

突然クレムリンを出てモスクワ驛頭に松岡外相を見送つたスターリン書記長は、極めて人間の氣配を感じさせる人である。スターリン書記長の手は意外に柔かくその顔は「眼が笑ふ」といふ日本の表現法がぴったりとあてはまる温谷である。この手と顔の奥にどうしてあの革命と肅正といふ血と鐵の意志が滲むかと思はれるばかりである。深淵をのぞくが如き人物と評した人があつたが、適語であらう。スターリン氏が愈々首相に就任してソヴェトロシア指導の表面に出て來たが、これは私が歸途の車中、驛毎に並ぶスターリン氏の大きな肖像を眺め、民衆の彼に對する氣持を見て、必ずや近い中にかくならうと感じてゐたところである。鬭争に次ぐ鬭争の過程にあつては人間の實力だけで十分であるが政治力が安定してくるに従つて鬭争ひとつた今日の地位に恒久性を與へやうとする立場に及んだとき、その獨裁者は好むと否にかかはらず、超人的存在に自らを高めて民衆に臨まねばならなくなるのだと私は思ふ。

(四頁より續く)

何處からともなく「自由印度放送局」なる名前が盛んな反英的な放送が印度語で行はれてゐる由で印度人方面で相當受けてゐるやうであるが、その本體は印度政府必死の努力にも拘らず未だに突留められないと傳へられてゐる。兎も角印度は現在ラジオだけが自由を許されてゐるので各國の對印宣傳はこれに集中されてゐるといつても過言でなく、特に獨逸の力の人れ方は最物凄いと謂はれてゐる。之に對抗する爲め印度放送局では町の要所要所に擴音器を備付けて一般公衆に英國側の宣傳を聞かせる居るが、近東に戰禍が飛火した今日では、定めし猛烈果敢な國際無電宣傳戦の火花が全印度を蔽ふてゐることであらう。

# 同盟生活の一ヶ月

學窓から電話と鉛筆の生活へ投げこまれて一ヶ月、以下新入生諸君が語る「同盟生活」の感想

## 「馴れ」と新鮮

長興 道夫

「何よりも馴れだ」と機會ある毎に先輩から親切な助言をうける。もつともだと思ふ。あるひは馴れ以前の何物もないのかとさへ考へる場合もある。しかしどこか割切れないものが残る。世間識らずの新米の痴言と笑はれるかもしれないが、自分には馴れから来る新鮮さの喪失といったような豫感がつき纏ふ。

先輩方はこれをどう解決され、また現にどういふ清涼劑を用ひられてゐるだらうかとこんなことも考へる。この薬だけは自分で發見しなければならぬ。先輩達の苦悶の道程を無視して「馴れ」の言葉で済ませるにすれば自分は動脈硬化で斃れるだらう。

日本は、われわれは、若々しく進んでゆかねばならぬ。

## 音とセンス

今井 幸彦

入社一ヶ月の感想を書くと云はれて、さてと思つて自分の内心をのぞいて見たが何もない。纏つたものが一つもない、と云つた方が確かにも知れぬ。始めの内は夜家に歸つて床に入つてから、耳元で電話のチリ／＼、デリ／＼云ふ五種類の鈴の音が執拗にして仲々寝つかれなかつた。近頃は締切時間が切迫して、記事を書く／＼とせかれ、ハツとして夢から醒めてとび起きる。自分の内にあつて、今

## 初日と佳節

堀 義明

ノホソンの學生生活を清算していざ同盟社會部のデスクに割り込んだ第一日、時間空間の急變に「オヤオヤ」と茫然自失、ところへ矢つぎ早の電話が遠雷のやうに轟くと「おい、だめだ」と早速落雷した。

だが夕刊のメ切が過ぎてひととき、銀座のビル街を抜けてくる春風に吹かれながら、一同位階階等の衣をかたくり棄て、無邪氣な遊戯、雑談に豆茶を飲むと、やうやく人間らしい氣分に歸つた。

天長節觀兵式陪觀がとりもつ縁で憲兵さんと知り合つた。

兄貴のモーニングを拜借したら朝つばらから結婚式かとからかはれた。夕刊はなしといふ氣になつて皇軍の威容に見とれて歸社すると、ソラ雜欄を書けとの御命令、一時間もかゝつて提出すれば豫定稿の改悪だと大談判、現場を見ないO次長が忽ちにして書く「スナッブ二題」に三嘆したが、僕はあれやこれやお小言に悲鳴をあげやしない、有難や／＼と自己反省のネタにしてゐるのである。

## 教壇からデスクへ

小松 武雄

二年間の教壇生活を捨てて張り切つて同盟へとび込んだが元の生活が生活だつただけに少からず面喰つた。然し失望はしなかつた。實の所私は新聞人の生活をよく知らなかつたのだが、少くとも同盟は報道報國の精神に燃えて日々の仕事を楽しんでやつてゐるのを眼のあたりで見ても心から頼母しく嬉しく感じた。初めの一週間位は馴れぬ仕事で千切れそだつた神経も、鍛錬の結果次第に太くなつた様だ、生來内氣で温厚にすぎた私の心臓も日増しに強大になつて行く様だ。フアイトも出て来た、無我夢中で過した一ヶ月間だがその間に仕事の要領が少しは分つて来た。興味も出て来た。蜂の巣をついた様な騒然、然るたるデスクも今では楽しい安住の地となつた。

## 戰場と職場

石上 詔

最近數ヶ年の軍隊生活の體驗を最もよく活かし得るに違ひないと考へて選んだ新聞記者生活だつた豫想は果して違はず、といふよりこれは正しく戦争そのものだとの感益々深まるばかりだ。

この事變の初め頃〇〇から内蒙平原數百軒を三日二晩不眠不休で兵輪送し〇〇日からの攻撃開始に辛じて間に合つた記憶は、今デスクで時計を氣にしつゝ原稿書く氣持に通ずる。書いては消し、消しては書いてやう／＼仕上げた原稿が左程文句も言はずにパスするのは、泥濘地で自動車を曳いたり押したりして目的地に辿りついた時と同じだ。また、或る時山西の某縣で命令受領が不明確だつた爲二日間たつた一車輛で敵中を彷徨したことを想ふと、記事の明確、

## 印度のチャイナリズム

前ボンベイ支局長 蘆田 英祥

### 貧弱な新聞界

印度には百年以上の歴史を持つ新聞紙が數種あるが、何れも小規模で我國の新聞業に比すれば格段の見劣りがする。英字紙と印度紙を通じ十萬以上の發行部数を有するものは皆無で六、七萬程度のものさへ三、四種を數へるに過ぎない。その原因は文盲の多いこと、言語、文字の難多、地域の廣大に基く勢力範圍の地方化、資本主義の不發達等に因るものであると認められる。

### ロイテルの獨占

外國電報は總てロイテルの獨占する所である。従つてあらゆるニュースが英國本位の色彩を有することは勿論で支那事變に關する外電も重慶側の宣傳を多分に織り込むことを怠らず、その非常に歪められた報道が印度人の對日認識を大いに謬らしめてゐる點は、大東亞共榮圈の確立、大亞細亞解放を目指す我國として斷じて見遁して

### 國內通信機關

印度國內ニュースの蒐集額布には、イー、ビー(アソシエテッドプレス)、オヴ、インディア、ユービー(ユニテッド)、プレス、オヴ、インディア)の二社何れも米國のAP、UPと關係があり、前(以下四頁へつゞく)

## 報道寫眞展で

### 大カツプ獲得

北支總局

北支の治安強化確立運動は三月下旬から華北全域に亘つて行はれこの運動の全面的活躍情況は總局寫眞部員及各支局員が一翼に参加して撮影したが、北支報道寫眞映畫聯盟主催の同寫眞展(四月二十

七日から三日間中央公園新民堂にて開催)を機として各方面からの作品五百餘點中優秀作品三百餘點を出展、最終日には王揖唐委員長をはじめ余市長林情報局長等多數名士の參觀があつた。五月三日午後七時閉會と同時に賞品の授與式が行はれ、一等、華北交通、二等東亞新報、佳作十四點に對しそれら大カツプが渡されたが、同盟では北支總局で二點保定支局で余

市長の特選賞を、太原、徐州、濟南の各支局佳作賞等計六個の大カツプを獲得した。十九個のカツプ中六個を獲得したことは北支總局管下の社員寫眞の腕を賞讃するもので今後北支ではどこに事件が発生しても記事も寫眞も大丈夫との自信タツブリ(小椋生)

★ ☆ ☆ ☆ ☆

# 爛漫の春に酔つて

## 各地の“休刊日”紀行

春の休刊日四月三日、本社各部はじめ各地支社局では、年に僅か二回與へられる「我等の休日」をハイキングに運動會に、思ひ思ひの趣向で享樂した。東京本社では政經部及び社會部の熱海温泉行、外信部の湯河原行、調査部の牛久沼ハイキング等をはじめ各部とも近郊の山へ温泉へ繰り出したが、當日は四月はじめて續いた「春の寒波」が解消して高温暖風の好日和となつたので、帝都一般人士の行樂も物凄く、超満員の汽車では何れも悲鳴を上げた様だつた。

### 四班に分れて

#### 名古屋支社

名古屋支社では編輯、通信、經濟、發送の四班に分れて、野に山に海に樂しに鍊成の春を満喫した以下各班紀行の報告—

▽吉川支社長を擁する庶務の一歩を交へた編輯陣は紅二點も交る

### 岩永未亡人逝去

岩永前本社社長長鈴子未亡人は急性肺炎のため去月十八日午後一時四十三分品川区上大崎四ノ三三の自邸で逝去した。享年五十七。一昨年九月故社長の逝去以來、本社在職の嗣子信吉君は大陸にあり淋しい日を送つて居られたが、月初めの微恙より病勢急變、信吉君も飛行機で臨終に駆けつけるといふ急逝であつた。葬儀は二十一日青山齋場内外多数名士、本社職員參列の下に神式により執行盛儀であつた。

▽林主任以下三十名の發送部は青春のハリキリボーイ揃ひ、午前九時關急長島下車、學校教練そのまゝいざ歩け！歩け！と鐵脚の強行軍、野越え、丘越えのハイキングで四邊を壓しつゝ、鐵脚行軍幕進又幕進多度神社に參拜して行程二十キロのハイキング。

### 濱邊の大運動會

#### 關門支社

この日我が關門支社局では日本海に面した白砂青松の景勝地安岡海濱ハイキングを行ひ、波打際の砂地に於て一大運動會を開催した一行六十餘名、海水浴に使はれた古びた小屋脇に竹竿を押し立てて同盟社旗を最尖端に萬國旗を縦横に張りめぐらす、スタートラインや決勝ラインを濱邊に打ち寄せた海藻を集めて作る。にはか造りとは思へない堂々たる運動會場だが、抜け目のない街の小商人が乳母車に密柑やラムネを積んで臨時に開店する、大變な賑ひとなつた。定刻十時開幕、運動競技は先づ男女百米少年組、壯年組、老年組の豫選から開始、十數種目に至る豪華版である。着飾つて来た姫君達も遂には裾を高々とかかげ、男子組からは猿又一つで飛出す元氣者も飛出す。顔書き、パン喰等の競技は人氣を呼び拍手喝采鳴り止まず見物人の中から私設應援團長や手傳人まで飛び出す盛況だつた。

### 岡村次長歸朝

松岡外相に隨行して歐洲へ出張中だつた本社編輯局長岡村二二氏は去月二十三日歸京 (見聞記第一面所載)

### 家族ハイキング

#### 台北支局

時局の脚光を浴びて一躍大重役割を演ずるに至つた臺北支局は益崎支局長のモットーとする「支局の家族化」を實現して支局長全家族のハイキングと決定、午前八時全員支局に集合して社旗を春風に翻へしながら支局長夫妻以下四つ

### 歩け！山の湯へ

#### 長野支局

したスプリン競争、親子目隠し競争等々。婦人子供對抗競技に子供組に夢中になつて應援し良きババ振りを發揮するなど破顔爆笑！捧腹絶倒！それより卓を圍んでの久し振りの日本酒にほろりとせられ八時近く散會した。



顔書き競争 (關門支社)

### 兩支局開設

今般左記兩支局を開設、川崎は四月一日から、平壤は五月一日から業務開始

#### 川崎支局

川崎市砂子町二ノ五九  
同盟通信社川崎支局  
電話川崎四四四五  
支局長 松本 兼吉

#### 平壤支局

平壤府紅梅町一平毎ビル内  
同盟通信社平壤支局  
電信略號「イゼウ」  
ドウマイ  
支局長 岡本 一男

### マニラ支局移轉

支局は今般通信發行開始により左記商業街に移轉(但し郵便物は従來通りの私書函宛)

Domei Tsushinsha  
205 Crystal Arcade,  
Escolta, Manila.  
Tel. 2-40-57  
P. O. Box 391, Manila

### 厚和支局移轉

今般左記へ移轉  
厚和市舊城新街道街七三  
同盟通信社厚和支局

そこの子供まで參加した。總勢三十六名が蜿蜒長蛇の列を作つて温泉地北投へと行進、十時半近く目的地北投の専賣局クラブに着し直ちに宮城遙拜默禱の後一同一風呂浴びた後この日の豪華版運動會に入り、婦人子供服を主眼と

支局長以下全員十五名、朝七時半といふに一同佛都の支局長野驥に集合行く先は別所の温泉「歩け」の實踐である。  
信濃路の春は遅いと皆がいふがけふは春光サンサン陽炎が燃えて雲雀が低く高く鳴く絶好の歩け日

人事 (四月)

海外へ

前農夫 (北支) 濟南支局長へ 堀口瑞典 (通信局海外部次長)

ウイシー支局長へ 牧内正男 (編輯) マニラ支局長へ 小椋廣勝 (マニラ)

香港へ 潮海秀之助 (査閲部長) 中支 (出張) 源關正壽 (編輯)

北支 (臨時) 海外より 竹中三郎 (濟南支局長) 通信局技術部次長へ 殿木圭一 (香港)

編輯へ 國內 鈴木木一 (清津) 清津支局長へ 陸奥陽之助 (編輯)

通信局海外部次長 瀧村鐵生 (金澤) 通信へ 住谷金吉 (編輯)

部長待遇トス 古川秋太郎 (名古屋編輯部長) 仙臺支局長へ 松本兼吉 (經濟局業務主任)

川崎支局長兼務ヲ命ス 板垣武男 (編輯) 政經部次長へ 西村二郎 (調査)

情報部次長へ 船崎徳太郎 (京城) 平壤へ 布浦芳郎 (總務)

編輯へ 岸江憲一 (編輯) 調査へ 矢野勝一 (福岡)

佐藤文三郎 (新潟) 來栖篤 (仙臺) 通信へ 山添正次郎 (通信) 新潟へ 村瀬太一 (通信)

仙臺へ 鈴木博三 (大阪) 山村正之 (大阪) 原誠 (名古屋)

今川一雄 (京都) 高瀬太郎 (神戸) 社員トス 菅原昌子 (通信)

金田允子 (桐生) 廣岡賀津 (横濱) 坂井つる代 (横濱)

廣野愛子 (福岡) 齋藤子之吉 (清津) 濱口浩一 (清津)

手塚秀雄 (天津) 准社員トス 新入社 佐々木省吾 (札幌)

松岡謙一郎 (編輯) 今井幸彦 (編輯) 堀義明 (編輯)

長與道夫 (編輯) 小松武雄 (編輯) 今村俊行 (通信)

志村昌夫 (通信) 田島昌敬 (通信) 榎瀨秀 (通信)

大内政彦 (調査) 前田清茂 (經濟) 淺田實美 (大阪)

奧幸雄 (大阪) 國頭義正 (大阪) 小野清弘 (福岡)

白井照雄 (總務) 坂久保ヒサ (通信) 大久保ヒサ (通信)

諸橋勝一 (旭川) 畑橋輝男 (平壤) 畑橋輝男 (平壤)

小林春行 (通信) 浦岡偉太郎 (編輯) 岩崎靜雄 (經濟)

野田浩 (平壤)

坂東安正 (京都) 岡田富美子 (神戸) 山崎美明 (總務)

退社 金海永光 (清津) 宮下美登 (甲府)

北原美登 (甲府) 目崎ミヨ (旭川) 東家廣一 (神戸)

湯川潔己 (經濟) 尻釜アヤ子 (大阪) 出口幾雄 (總務)

川村好子 (神戸) 寺田武代 (通信)

辻橋八千代 (熊本) 土居志氣雄 (仙臺)

岩松喜久治 (札幌) 内田元 (岡山)

相原キミ子 (總務) 岡井英逸 (京都)

依願解職 村上貞 (札幌) 其他 雷樹水 (臺北)

田村孝逸郎と改名 橋口義雄 (大阪) 死亡 菊田マサ (經濟)

志田マサと改名 石川元吉 (福岡) 休職

結婚 金正祿 (京城) 梶川博 (名古屋)

井關實 (中支) 岡崎保 (大分) 勝下虎彦 (青島)

内田正光 (總務) 西野正光 (編輯) 西向種吉 (大阪)

寺田榮邑 (南支) 菊田マサ (經濟) 萬喜久太郎 (經濟)

仙田伸雄 (名古屋)

伊藤千代子 (名古屋) 富田正章 (通信) 出生 礪原麗一 (通信)

礪原麗一 (通信) 岡崎龜市 (編輯) 橋本清太郎 (調査)

黒木正人 (福岡) 深津太郎 (名古屋) 山口重藏 (札幌)

漆原治 (大阪) 見舞 山内利三 (通信)

長尾陸也 (編輯) 増利幡兼雄 (函館)

布利幡兼雄 (函館) 橋口義雄 (大阪)

山片紀雄 (大阪) 熊木啓作 (編輯)

木村昇 (編輯) 菊地久太郎 (中支) 金木重俊 (中支)

吉富正郎 (北支) 堀内精次 (通信)

池見博吉 (通信) 藏田耕三 (通信)

岡本英雄 (編輯) 中谷長一郎 (福岡)

土田ツ子 (編輯) 岡本輝磨 (廣島)

周藤清 (廣島) 日下部吉郎 (總務)

種井善二郎 (編輯) 山本善守 (通信)

津川勝善 (通信) 藤原文雄 (編輯)

岩本清 (編輯) 田中功 (編輯)

上杉憲治 (熊本) 弔慰 佐久間克己 (調査)

洪鐘堂 (京城) 谷澤テイ子 (北支)

津隈敦士 (南支) 伊藤壽雄 (編輯) 多田貞三郎 (長野)

新山倉治 (經濟) 熊本啓作 (編輯) 藤下悦也 (編輯)

藤崎辰也 (通信) 伊藤耕介 (鹿児島) 退社 辻野敏子 (廣島)

宮崎源吉 (北支) 小谷豐四郎 (北支)

町田末四郎 (北支) 金鏡愚 (石門)

出口幾雄 (總務) 宮下和 (京都)

梶山駿光 (關門) 川村好子 (神戸)

東家廣一 (編輯) 長谷川文雄 (編輯)

日崎ミヨ (旭川) 土居志氣雄 (仙臺)

相原キミ子 (總務) 岡井英逸 (京都)

者はロイテルと一體を爲した純然たる英國の御用機關で、ボンベイカルカッタ、シムラ、デリー、マドラス等の主要地間に専用線を持ちテツッカーで刻々送受信してゐる

後者は印度人の經營で國民會議派と關係が深く主として印度人の立場擁護に努めてゐるが、政府筋の壓迫、財政難などの爲めAPに比すれば陣容、設備とも著しく貧弱たるを免れない。殊にこの社の一

番の弱味は外電網を持たぬ點で外電に關する限り前述の如くAPと一身同體の關係にあるロイテルの

疎離に委せざるを得ないのである。斯くて印度人が自主的國際觀を樹立する爲めにはどうしてもUP自らの外電網確立が必要である

と謂はざるを得ない。

奇酷な言論取締 印度政府では以前より相當嚴重な言論取締りを行つてゐたが、戰爭勃發と共にその態度は一層峻烈苛酷となり新設されたプレス、アドバイサーの檢閲なきニュースは一切頒布、掲載を禁ぜられるに至つた。加之當局は社説、見出しに迄干渉の手を延ばし或る印度紙の編輯責任者は不必要に大きな見出しを使用したとの理由で體刑を課され又他の編輯者は政府發表記事を縮めて發表したとの廉で起訴される始末で、中には社説欄を白紙の儘で發行する新聞紙すら現はれるに至つた。ガンデーがその機關週刊誌ハリジャンの發行を一時中止するに至つたのも政廳の言論壓迫に憤慨した爲めで、目下翁が同志と叫合して敢行しつつある個人的不服従運動の直接目標も實は言論の自由恢復にあるのである。

外國向電報は英、佛語の外は一切禁ぜられ、暗號は勿論御法度である。檢閲は嚴重を極め筆者の如き屢々警察に出頭を命ぜられ發信の目的、種の出所などについて訊問を受けたが、この他住宅には常に二、三名の監視人が行動を見張つて居り、迂濶に人に會ふことも出来ない始末であつた。

日本からの新聞雜誌類は茲一ヶ年程は殆んど配達されず、在留邦人は印度紙上に掲載されるロイテル電報と日本放送局の海外ニュースによつて僅かに故國の便りを知り得るにすぎない。

國際ラジオ宣傳戰

唯茲に一寸奇異に思はれるのはラジオの短波受信機の使用を許してゐること、ラジオだけは獨、伊といはずロシアのでも日本のでも自由に聞けることである。最近

(一頁へ續く)